

卒都婆流
 説
 去禡よ三人の人ひじ常じょうハ三处さんしょ現あらわの御みや
 よ通つ夜よをる柳やなぎも有りリり或も夜よ通つ夜よをる
 終まつ夜よ今いま後あと唄うた口くち色いろるが晚ばんき方かた若わかしよさよ
 せせととおお目め睡ねくくつる夢ゆめよ伸のすも白しらい帆ほ
 挂かししる小こ舟ふなを一いつ般へん汀みへ向むかて漕くわ寄よきみみみ
 中なかうう紅べにの袴はまううる女めの房ぼう達たつ下げ二に

卒都婆流
 平家正節一之上、名古屋伝承句、
 換節

平曲吟譜新集 卷二



本コンテンツは、文化庁の委託業務として、
 平曲研究所が実施した平成21年度芸術
 団体人材育成支援事業 鳴海家本「平曲
 吟譜新集」に関する情報交流 の成果を
 取りまとめたものです。
 従って、本コンテンツの複製、転載、引用
 等には文化庁の承認手続きが必要です。

三十人諸より
 鼓を打て、
 声を祖て嘗
 木も忽ちよ花
 嘆実枯らとこそ
 反し押返し三返唄ひ落りて機消機よ
 不失よる者
 覚へゆらふ素
 二不權現の内西の五音と
 神ハ又千手の二十八部衆の其一ツ生を嘗
 や奉るハ本地千手觀音もて坐しよれ
 やば以古能受おそ
 梶節捺易
 又を成て
 康入道お坐あり奇異の
 化現と
 羅刹ふ三不權現の中西
 の前と門をもるハ本地千手觀

三十人諸より
 鼓を打て、
 声を祖て嘗
 木も忽ちよ花
 嘆実枯らとこそ
 反し押返し三返唄ひ落りて機消機よ
 不失よる者
 覚へゆらふ素
 二不權現の内西の五音と
 神の如く
 思を成て如何
 機よも是ハ神の化現と
 康頤入道お坐あり奇異の
 覚へゆらふ素
 二不權現の内西の五音と

音まで鶴生ひ旅神ハ又千金の二
 ちハ旅宿の其一もせば以ひ御
 交こそ未し夕
是或夜又二人をよ通夜て先の如く旅夜今
 旅喫リ色なるが曉が方若しうよ壁
 睡くうつる薄よ沖ようも吹来風の二人
 が秋よ木の葉を二ツ吹掛けり仰と聲
 を取て見る色ばゆ無理の梅の葉えぞ有
 ける下ゲ彼ニツの梅の葉よ一筋の秋を虫喰よ
 あそきくうる色上ホ千早振神よ祈の下繁
 色巴あざる都へゆる有指声康頤入通
 故にの意シテまみ金よ税本の卒都婆を造
 阿字の梵字年号月日假名寔名二首乃
 歌をそ書付くる上ホ敷薦摩淳仲の小嶋よ下

音まで鶴生ひ旅神ハ又千金の二
 ちハ旅宿の其一もせば以ひ御
 交こそ未し夕
是或夜又二人をよ通夜て先の如く旅夜今
 旅喫リ色なるが曉が方若しうよ壁
 睡くうつる薄よ沖ようも吹来風の二人
 が秋よ木の葉を二ツ吹掛けり仰と聲
 を取て見る色ばゆ無理の梅の葉えぞ有
 ける下ゲ彼ニツの梅の葉よ一筋の秋を虫喰よ
 あそきくうる色上ホ千早振神よ祈の下繁
 色巴あざる都へゆる有指声康頤入通
 故にの意シテまみ金よ税本の卒都婆を造
 阿字の梵字年号月日假名寔名二首乃
 歌をそ書付くる上ホ敷薦摩淳仲の小嶋よ下

海より浮くる書
卒都婆造坐しよ隨て
海より入れ巴日糸積れバ卒都婆の數も積よ
其思ぬ心役の風兵成しテル又神也
佛陀もや送りや身ひようル允キ本の中よキ本
安芸の國嶽島の大御神の御前の浦す打
上とく
爰より康乾入道が五縁有ルる僧の
若能可俊も有ハ彼等へ渡て此後房をも

我有りと想ひよハ告よハまの沙風下歌
我有りと想ひよハ告よハまの沙風下歌 異ひやれ者
シヨウフミテルモト故ノハ志翁物哉下歌是
我浦より持て生赤箱て中上上南無帰命頂礼梵天
帝釋四大天王空守地神玉城の鎮守諸大
明神別てハ雄狹の雄現安芸の少微島の大日
神貴でハ本成花都へ傳へて賜白とて下翌冲
津白浪の寄てハ返る度毎ニ卒都婆を不

跡せば此へ走り向かし始より漏度利生
の今より迄甚深奇特の事を語りける
去ばよや八社の沸泉を並べ社海神
の邊あれハ次の湯干よ里り
大名居丹の玉垣獨宿ノ如し次引ぬ夏の
夜あれ共に前の白洲より霜を立
中音
上
覺へて起しるやうに漸く日暮月指先て沙み
轍は

司馬文正西園後行より生てうるが先歎出を集
りなる事よ多ひ人と見ゆて得衣裳束成俗入
生来下世俗何と物語を志る也よ
神ハメル成ルる因縁成以て海島の舞矣
よ縁をハ儀やまふりんと問をば
中上中上中上中上中上中上中上中上中上
あ婆羅沙王の歌ニの娘吉賀君の妻

上
 漢ルタニミナカシヤシ御れ窮来る集所共
 の中ト卒都婆の形の有ルを何と考セテ取
 りて元々レバ冲の小瀬よ哉有シ書流セラ云先
 へ文字戎バ勝入刻体ムラルレバ波モ洗
 れ近鮮ヒヒソアセハ見
 ハシニ見えテテルルレバ口説
 ヒハシニ思義の口ひを成テ後之の肩よ指都
 帰上テ康頤入道が老母の尼公事あ子母の
 都婆婆も高ちの方ヘモ淘れ行レテ仰し
 よ是迄僧まで乞食物をば思召せらんとぞ
 悲シルる口説遙の歟少メ及テ法宣尼を處
 說有テ定せ熟化者共が命の未生を有こそ
 迪説恨より流涙流さぬかとおもひ是

上
 漢ルタニミナカシヤシ御れ窮来る集所共
 の中ト卒都婆の形の有ルを何と考セテ取
 りて元々レバ冲の小瀬よ哉有シ書流セラ云先
 へ文字戎バ勝入刻体ムラルレバ波モ洗
 れ近鮮ヒヒソアセハ見
 ハシニ見えテテルルレバ口説
 ヒハシニ思義の口ひを成テ後之の肩よ指都
 帰上テ康頤入道が老母の尼公事あ子母の
 都婆婆も高ちの方ヘモ淘れ行レテ仰し
 よ是迄僧まで乞食物をば思召せらんとぞ
 悲シルる口説遙の歟少メ及テ法宣尼を處
 說有テ定せ熟化者共が命の未生を有こそ
 迪説恨より流涙流さぬかとおもひ是

小松の大島の許へ下遣されしうるれい丈の
 禅門よ兄を奉つらる三疊
鳴
強
舟
波
思
入
甲
山
の
急
赤
人
八
上
芦
島
 の船を泳め下位吉の明神ハ立き
 思を成三輪の明神ハ立てる門を
 盛雄等三十字の和歌を始めゆく
 来夜この神明佛陀彼泳吹よ依て百千
 端の足ひ哉速ゆへり初望入通相も岩木
 成ねば世よ哀氣よおそ宣ひれ
口説
入通相も
の
闇
と
も
上
も
も
鬼
鬼
の
流
人
の
歌
歌
口
号
 ぬハサウクう備も千本造りあやる卒都
 婆あれいだこそハ惜しきも有ルあ蘿
 上

模武

を小松の大島の許へ下遣されしうるれい丈の
 禅門よ兄を奉つらる三疊
柳
の
本
の
人
九
上
柳
の
本
の
人
九
上
 送されしうるれい丈の
 鳴強舟波思入甲山の急赤人八上芦島
 の船を泳め下位吉の明神ハ立き
 思を成三輪の明神ハ立てる門を
 盛雄等三十字の和歌を始めゆく
 来夜この神明佛陀彼泳吹よ依て百千
 端の足ひ哉速ゆへり初望入通相も岩木
 成ねば世よ哀氣よおそ宣ひれ
口説
入通相も
の
闇
と
も
上
も
も
鬼
鬼
の
流
人
の
歌
歌
口
号
 ぬハサウクう備も千本造りあやる卒都
 婆あれいだこそハ惜しきも有ルあ蘿
 上